

# 中国と日本の数字文化における 比較研究

唐 向 紅  
鷺 尾 紀 吉

<目 次> はじめに

I. 中国の偶数の文化

1. 偶数が好きな中国人
2. 食卓上の「四」と偶数

II. 日本の奇数の文化

1. 奇数が好きな日本人
2. 神秘的な数字「三」について
3. 文学作品における数字

III. 中日数字におけるカルチャーギャップの民族心理

1. 「八」をめぐる
2. 「九」について
3. 好まれる数字と嫌われる数字

おわりに

参考文献

## はじめに

言語学において、数字は「数詞」と称され、独立の品詞でもっぱら数量の意味を表している。そのため科学的な数字の世界で、その秩序は厳格で役割も明らかである。しかし、言語の一部分でもある数字は、人類が長期的に使うなかで、極めて豊富な文化の内包が沈積し、非常に幅広い文化の視野が開拓されていた。数字は、文化形態の一種として単なる数値の記号あるいは数学の概念だけではなく、人類文明の発展の過程で異なった世界観、哲学観、宗教観、価値観と審美眼を反映したり、象徴したりする。かなり強く民族文化の特徴を表現している。数字は古人の世界観のなかで、大変重要な役割を果たしている。宇宙の形成や万物との係わりなどに関する複雑な哲学の問題を述べたり、説明したりする時、古代の哲学者の多くの認識、思想および理論は、すべて数字から離れられない。したがって、数字は神秘化された。数字に対する崇拝は民族によって、それぞれ違う。各種の数字の異なる運用は、鮮明に民族文化の伝統と特色を表し、その選択性は古い民族文化の根源と深い民族文化の詳細とかかわりあって、それぞれの民族はその民族特有の数字の観念を形成した。

世界のあらゆる言語と同じように、数字という文字も中日両国の言語のなかに存在する。これらの小さく、かわいい数字はいろいろな情報を伝えると同時に、人々の感情をも交流して、どんな言語でも取って代われない役割を果たしている。しかし、国の習慣や風土の違いによって、小さい数字にもさまざま異なる感情や意義を与えた。中日両国は一衣帯水の隣国であるが、数字の好き嫌いはまったく同じとはいえない。日常生活や仕事のなかで私達はよく数字を使い、奇数が好きな人もいれば、偶数が好きな人もいる。好き嫌いが違うので、1つの小さな数字には人々にもたらされた気持ちや影響も異なっている。中国人はそうであるが、世界各地の他の民族も同様である。中国人が好きな数字は、日本人に嫌われて、反対に中国人に嫌われた数字は、

日本人に好まれる。これはたぶん文化伝統と習わしの相違のためであろう。

本稿の目的は、中国と日本の数字文化に対する比較研究を通じて、両国の数字文化の情報と独特の魅力を了解し、異なっている両民族の数字における使い分けを分析して、そのなかに含んだ特有な民族文化の心理を指摘し、もって異文化コミュニケーションのなかで、できるだけ交渉や摩擦を免れることである。

## I. 中国の偶数の文化

### 1. 偶数が好きな中国人

言語は社会歴史、社会文化、社会習慣の反映で、鮮明な社会属性、地域属性および時代属性を持ち、民族の知恵を沈積したり、民族の歴史や文化を凝集している。数字は言語構成の一部として、ある文化的意義に伴って、一種の価値観と審美の情趣を体現していた。

周代のころ、中国人はノコギリソウという草で吉凶を占って、ノコギリソウの数とパリティによって吉凶の判断を行った。朱自清氏は『経典の常識』のなかで以下のようにいった。「ノコギリソウを1束取って、何本あるか数えたら、奇数かそれとも偶数かを見て、吉凶を断定することができるかも知れない。古代の人は数が整然としてまた変化があることをみて、神秘的なものだと思っていた。数の連続、循環とパリティ、すべて人々の好奇心を引き起こす。その時、数に魔力があることを信じたから、巫術のなかでそれを使っている。われわれ普通の人は、今でも、相変わらず奇数が嫌い、偶数が好きなのは、たぶんあの巫術の残りであろう」。今に至って、中国人は依然として偶数をよしとし、偶数を良い数字とする観念は根強い。中国人のこのような世界観と方法論が審美の心理状態のなかに現れたのは、偶数をよしとし、偶数を美や吉とする賞美する心理である。すなわち、すべての文化の領域や文明的な活動のなかで、偶数になって対になることが美しさの極まりで

あり、最高の境界なのである。

## 2. 食卓上の「四」と偶数

中華文化に残ったいろいろな現象は、中国人の偶数のコンプレックスを十分に説明できる。結婚披露宴は8席あるいは偶数の席になったり、宴席を設けて客をもてなすとき4の皿数のおかず、あるいは偶数(2, 4, 6, 8, 10)のおかずを用意する。四椀、あるいは偶数の料理を食卓の上に並べて客にバランス、落ち着き、上品、団欒の感じを与えている。中国人は4と偶数によってバランスと穏やかさを求める思想を持っているといえる。奇数なら無礼とみなす。結婚お祝いや、親友を訪ねる時、偶数の贈り物を送るのは、喜び事が重なって来たという願いを託す。そうでなかったら、しきたりがわからないことを疑われたり、あるいはわざと人に嫌がられると思われたりする。偶数を送ることこそ情理にかなう。ここ数年来このような習慣は絶えず変化し、だんだんと奇数の贈り物を贈る人もいる。しかし、贈った人と贈られた人はどうも落ち着かないような気がする。このような偶数を好む社会的風習が、昔から何ごととも対になることが好きな中国人の伝統的な価値観と密接に繋がっているようである。

中華民族の伝統文化の中で、釣り合いや対偶をあがめる思想はすでに社会生活の各方面にしみ込んで、しかも徹底的に現れる。一般に中華文化を理解する人は、中国の古代建築は都市、宮殿、寺院から普通の民家まですべて左右対称である、という特徴を持つことを深く感じている。もし東に塔があれば、必ず西に塔を建てる。片側に殿堂があれば、向こうにきつと同じ殿堂を建てる。元気いっぱいでも左右両側にそびえ立ったライオンも必ず対になるので、人に極めて穏当な感じを与えてくれて、そしてその中から安全性を感じ取る。近代的な建築様式や配置を広く見て、そのなかに含んだ中華民族の特有な対になる伝統的な審美の心理を発見することができる。

このような偶数や釣り合いが美しいという思想は、またその他の文化形態の面に表現されている。詩歌の作品の中で、対偶法は1つの重要な芸術の手

段になる。たとえば、詩と詞は対句になって、書道、絵画などは釣り合いを講じて、古代文化は「2面論」を重んじた。わが国の唐時代の有名な詩人白居易の『長恨歌』のなかに「在天愿作比翼鸟，在地愿为连理枝（天にありては願わくは比翼の鳥とならん，地にありては願わくは連理の契りを結びたい）」という人々によく知られた詩句がある。昔から対になる物事を通して、愛情の真摯や恒久を謳歌したり、幸せで円満な願望を表す文学、芸術の作品は、さらに枚挙にいとまがなく、いくらでもある。

「双」，「対」，「両」（注：この三つの漢字は中国語で「二つ」の意味を表す）は数字の範疇に属していないが、すべて数の意義を含めており、中国人の偶数をあがめる思想を表している。そのため、万事めでたく順調を表す言語や芸術の表現に、「対になる」という言葉がよく出てくる。例えば、「贈り物は対になる（贈り物をするとき二つあるいは偶数を上げる）」，「喜び事が対になる（二つのめでたいことが同時に来る）」などである。また、「竜鳳が吉祥が現れる」，「オシドリが水で戯れる様子」などの語句のように、中華民族の思想の中で、いつも2つの分割しきれない、それとも自然に対になる、情理に従って一体になる人、物あるいは事を一体にして、「双」，「対」と称する。それは民族の価値観と審美の情趣を体現していて、一定の文化の意義を持っている。

わが国の台湾と福建省南部地区で、昔から人々が何かをやる時よく吉か不吉かを重んじる。起工式、家作り、引越し、結婚、店開き、外出から、見舞い、散髪、修理することまで、さまざまな煩わしい小さな事でも慎重に吉か不吉かを問い、「黄道吉日」（大安吉日）を選ぶ。永久に万事めでたく順調に進んで、穏やかな幸福や、心の慰謝を求めて自信心を強めることが目的である。いわゆる「黄道吉日」は「偶数の日」である。もし月、日が皆偶数で、さらに曜日も偶数になったら、もっといい。もし陰暦と陽暦がみな偶数で重なったら更に吉に吉が加わる。日本の「大安」は大吉大安という意味で、中国の「黄道吉日」と同じである。普通、私達は日本のカレンダーの期日の下に「先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口」などの字が見える。それは吉凶

を表すのに用いる。6日ごとに循環する。これは中国道教の陰陽八卦の『六壬時課』で、日本の室町時代に中国から日本に伝えられて、日本人に変えられ、江戸後期に庶民の間で広く使われるようになり、今でも衰えず、依然として盛んに行われる。日本人はふだん小さな事にこだわらないで、しかし祝典とか重大な事が起きると、必ず吉日を選ぶ。その時、カレンダーをめくると願いどおりに吉日を選び、凶悪を避けることができる。「大安」は「大安日」や「大安吉日」とも呼ばれ、多くの日本人はこの日に結婚式を行う。「赤口」は大凶日で、午の刻（午前11時ごろから午後1時ごろまで）のみ吉で、それ以外は凶とされる。「先勝」「先んずれば即ち勝つ」の意味である。かつては「速喜」「即吉」とも書かれた。万事に急ぐことが良いとされ、また午前中は吉、午後は凶とも言われる。「友引」は「凶事に友を引く」の意味で、葬式・法事を行うと、友が冥土に引き寄せられる（すなわち死ぬ）との迷信があり、友引の日は火葬場を休業とする地域も多い。「先負」は午前中は凶、午後は吉で、陰陽道によって、この日には公務や急用が禁忌である。「仏滅」は六曜の中で最も凶の日とされ、婚礼などの祝儀を忌む習慣がある。この日に結婚式を挙げる人は少ない。要するに、吉日を選ぶ方式は同じではないけれども、中日両国の国民の吉を求める心理と伝統的な習慣がぴったり合っている。時間が経つにつれて、偶数の日である「黄道吉日」に式を挙げる風習が次第に薄くなったが、重大な事が起きると、人々は縁起をかついで、相変わらず慎重に吉日を選ぶ。

## II. 日本の奇数の文化

### 1. 奇数が好きな日本人

中国人は偶数が好きなのに対して、日本人は奇数をあがめる。昔から奇数は縁起がいい数字とする思想がある。日本人は奇数を陽として、吉祥を象徴すると思う。たとえば、日本語に「餞別」という言葉があって、遠くに旅立

つ日や転任・移転する人などに、分かれの印として贈る金品という意味である。普通、日本人は自分の経済力に応じて、そして相手と自分の親しさによって、お金の多寡を決める。しかし、お金の数の多少にかかわらず、必ず奇数で、普通は3千円、5千円、7千円、1万円、1万3千円、1万5千円になる。普段、贈り物をするとき、贈り物を縛る縄も必ず奇数である。

## 2. 神秘的な数字「三」について

日本人は「三」という数字が好きである。神社で行われる挙式で、夫婦の契りを結び固める「三三九度の盃」を交す。三方に三つ重ねの杯がのっている。一番上の小の杯で新郎から新婦、中の杯は新婦から新郎、大の杯は新郎から新婦と、一人が一つの杯を三回に分けて三杯を飲む。各種の祝賀活動あるいは集会を行う時、日本人は特に手をあげて「万歳」を三回繰り返して叫ぶことが好きである。日本人はどのようにして奇数の「三」にこのように熱中するかというと、その根源は「三」に対する理解にあって、先賢の「数」に対する認識にさかのぼるであろう。

「数」の観念が生まれて以来、数は人類思想の発展のなかで、自然科学の意義だけに限られるものではない。それは同時に自然と人間のコミュニケーションや、世界を把握する哲学の観念とされる。そこで、古ギリシャでは有名なピタゴラスの学派が現れて、中国では戦国時代に「陰陽数術家」がいた。ピタゴラスの学派は、万物の最も基本的な原素は数で、数は宇宙のすべての現象を支配する。それによって神秘主義を招く。中国の数術家は「物に生まれつきの像があって、像が生んで数がある。万物に数がない物がない。そのため、数で人や物の吉凶を占う」と思っていた。だから、戦国時代の「数術」は大体占い術であった。

しかし、戦国時代に「数」の観念で世界を解釈するのは「数術家」だけではなく、道家、儒家なども「数」の観念で宇宙の形成、存在、発展を解釈することに力を尽くした。『老子』の第42章に、「道は一を生ず。一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」と書いてある。そのうち、「一」、

「二」, 「三」はそれぞれ実際の意味を持つ。普通, 「一」は「元氣」, 「二」は「陰氣」と「陽氣」, 「三」は天地が合うと万物を生む穏やかさを指すと思われる。儒家は『周易』をもって、ノコギリソウを折り畳んで数を求め、数で八卦を設けて、八卦から像を観測して、八卦によって辞を繋ぎ、「数」ですべての自然な現象と社会（親戚・交友）関係を演繹して、やまない宇宙の図案を現す。

中国の春秋戦国時代に、「数」で構成する宇宙の図案で、私達は「一」「三」「五」の3つの数字が最も重要な意義を持つことに気づいた。ここで、「一」と「五」は置いておくとして、「三」だけを論じる。庄子の思想の中で、「三」は有限の極まりで、また無限の始まりであり、それは万物変化の肝心なところである。『周易』の六十四卦の基礎は八卦（注：八卦：乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤。それぞれ方位や吉凶を表すのに用いる。）で、八卦は奇数の字画を陽とし、偶数の字画を陰とする。三つの「字画」は一列になって基本の「卦」となる。そして、三つの「字画」の中で、上の「1画」は天であり、天で像をなして、下の「1画」は地となり、地で一定の形を備えて、中の「1画」は人となり、人は万物の魂となるという意味である。それゆえ、「八卦」の原理は「天・地・才」を一括する「三才」であり、万物を包括する。宇宙や人生の変わりやすい規則を明らかに述べるもので、「天人の学」と称されている。ここから私達は数字の「三」が「八卦」3画の「三」, 「三才」の「三」となり、それは中国の「天人合一」という哲学の最高の知恵の基数となって、有限で無限を含み、あらゆるものを網羅し、すべてを総括する意義を持つことが見られる。だから、「三」は中国人の思想のなかで特殊で重要な地位を占め、特別な重視を受ける。

数字の「三」は神秘的な哲学の意義を持ち、中国の古代生活の各方面にしみ込んだ。たとえば、官は「三公」を尊重し、学問は「三老」を先輩とし、人倫は「三綱」を先頭に立つ等々。数字の「三」は中国人の生活様式と習わしに極めて深い影響を与えた。

「礼儀が三つになったらできる」というような規則は、実際の生活の中で



依然として維持してきた。たとえば、「三跪九叩の礼」（ひざまずき、3回頭をこすりつける様にお辞儀をするのを3回、計9回繰り返す礼）、「万歳を三回叫ぶ」、「酒が3回りを過ぎる」などのように、「礼儀が三つになったらできる」というしきたりは今でも中国人の生活での一種の掟と習慣であることは明らかである。

中国の道教、インドから伝えられた仏教、および儒家の文化は4世紀に日本に入って来た後、日本の文化の形成と発展に大きな影響を与え、日本の伝統的な文化を作り上げる基礎となり、日本の文化のなかできわめて重要な地位を占め、ずっと日本の民族に尊重され、日本人の哲学の観念、道徳的な標準と価値指向となった。そのため、日本人の「三」に対する崇拝は、中国の伝統的な文化の影響と深く関わっているといつてよい。

日本のカレンダーをめくってみると、私達は日本の13の祝日がほとんど奇数の日であることに気づく。そのなかで、一つの祝日は日本人が最も奇数を重視することを説明できる。この祝日は11月15日で、「七五三」である。男の子3歳と5歳、女の子3歳と7歳を祝う日である。両親は自分の子供にきれいな着物を着せて、いっしょに神社をお参りして、これまで成長したことを神様に感謝し、今後健やかな成育を祈願する。祝日の名称、日時から祝賀する対象に至るまで、すべて奇数でないものはない。「七、五、三」はまた日本人の祝典に用いる数字でもある。日本人は一、三、五、七、九の奇数がめでたいと思って、その中の「七、五、三」3つの数字を選んで正式の宴会の時、料理のコースとして、「第1セットは7つのおかず、第2セットは5つのおかず、第3セットは3つのおかず」とする。

### 3. 文学作品における数字

さらに取り上げる価値があったのは、日本の詩歌「和歌」と「俳句」である。「和歌」と「俳句」は、日本文学のなかで最も民族の特性を持つものである。それは中国の詩歌「騷体」の特徴を吸収し、日本語の表現力の基本的な特徴に基づいて、音数の規則ある変化を採用して韻律を構成し、それによ

って独特な短詩の形式を形成する。たとえば「和歌」、それは「五、七、五、七、七」、合わせて31の音数から規則正しい不揃いで構成した。日本和歌集『百人一首』の中で、唐に派遣した阿倍仲麻呂の『望郷歌』のなかで「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に いでし月かも」と歌っていた。唐の広々とした大空をはるかに見渡すと 美しい月が見えている。あの月は故郷の春日にある三笠の山の上に出ていた月と同じ月だろうなという故国日本への望郷の念において詠まれたという歌である。詩人の構想した境地や述べた望月と郷愁にかられる感慨の気持ちは、すべてこの31の音節におさめられた。このような詩歌の形式は素朴で、昔からずっと日本の文壇における詩人達が心の声を詠唱するとき、最も普遍的に、基本的に使われた形式であった。さらに「俳句」を例にとってみよう。それは同じように日本語の音声数に頼って規則正しい不揃いさがあって、「五、七、五」の17の音節からなる。たとえば、江戸時代に有名な俳句の詩人松尾芭蕉によく知られた詩がある。「古池や 蛙飛びこむ 水の音」である。春日、遅々たる春の昼下がり。水の淀んだ古池は森閑と静まり返っている。一瞬、ポチャッと蛙の飛びこむ水音がして、あと元の静けさに戻る。ごく短い17の音節で、弾んだ躍動感や高揚感がある反面、談林風の滑稽の影が残る。「飛びこむ」と日常語に直したところから、わびやさびにつながる水墨画の世界が現出した。もし私達はさらに探究すれば、「和歌」にしろ、「俳句」にしろ、各文の音数はすべて奇数で、センテンスも必ず奇数であることが発見できる。

日本の詩歌は、日本人が中国の詩と詞にある「五言絶句」と「七言律詩」を真似て作られたそうだが。しかし、中国の「五言絶句」は各文にすべて五つの字が並べられ、センテンスはすべて偶数である。たとえば、唐代の詩人王維の『相思』である。「红豆生南国，春来発幾枝？ 願君多采擷，此物最相思。（红豆 南国に生じ 春来 幾枝か発す 願わくは君 多く採り摘めよ 此の物 最も相思わしむ）」。「七言律詩」は各文にすべて7字が並べられ、センテンスも必ず偶数である。たとえば唐代の詩人張継の『楓橋夜泊』に「月落烏啼霜滿天，江楓漁火対愁眠。姑蘇城外寒山寺，夜半鐘声到客船。（月落ち

鳥鳴いて 霜天に満つ 江楓 漁火 愁眠に対す 姑蘇城外の寒山寺 夜半の鐘声 客船に到る)」と詠っていた。一体どうしてこのようにすべて奇数の順列の詩歌の形式を形成しているのか、訳が分からないが、私達はここから奇数を使うことを喜ぶのは日本の詩歌の特徴の一つであると同時に、日本の文化の特徴の一つでもあることが分かった。

### Ⅲ. 中日数字におけるカルチャーギャップの民族心理

#### 1. 「八」をめぐる

もちろん、日本人はただ奇数だけを重視するわけではない。中国人と同じように、「八」という数字に非常に好意を持つ。中国の成語に「八字為開（八は開と為す）」という成語があって、意味は「八」のように、1つの左払いと1つの右払いが両側に分かれる。中国人はこれで少しも隠れないことや単刀直入を比喻することが好きだ。しかし、日本人は「八」に好感を持つのは、「八」という漢字は、上は狭くて下は広くて、道を歩けば歩くほど広くなり、事業はますます隆昌することを連想させるからである。『新明解国語辞典』を開けば、「八」に対する解釈は、数字の意味以外に以下の意味もある。「和語の『八』が『弥』に通じるかの意に多く用いられる上に、字形が末広がり縁起が良いとする向きがある」。「末広がり」は「ますます広まって、ますます栄える」という意味で、「八」に数が多いという意味だけではなく、事業が発達する、縁起が良いという意味も含まれている。だから、日本人にとっても「八」という数は縁起が良いとあって好まれてきた。考察によると、中国文化が日本に伝えられた前に、日本人は「八」を神聖な数とみなして、この数字にめでたいことや栄えることが含まれていると信じられていた。めでたいことの日取りにしても、金額にしても、よくそのことが話題となる。確かに富士山の形状のように見えなくもない。つまり、日本では、漢字の形から得られるイメージを重視する傾向が強いということがここ

に反映しているのである。また、「八」を「意志が強い」と関連させて、日本の諺には「七転び八起き」がある。七たび転んで八たび起きるという意味である。何度失敗しても屈することなく立ち上がること。一度や二度の失敗ぐらいで気落ちせず、頑張るべきであるということ。また、人の世の浮き沈みは激しいことの喩えである。日本人は達磨法師をダルマと見なして、彼は洞穴で修行しているとき、七回倒れていて、八回目について立ち上がって、悟りの果を得る。だから、日本人は彼をあがめたり、敬慕したりして、家の中にダルマを飾って、それで自分に絶えず努力奮闘するように激励する。

いうまでもなく、中国人は「八」が好きなのは偶数の伝統の観念をあがめ尊ぶからである。今一つの原因は、「発財」(ファー・ツァイ, facai)の「発」(发 發),つまりお金を儲ける,金持ちになるという漢字と、「八」(バァ, ba)との発音が互いに近いことにある。発音が似かよっているために、縁起が良いとって好まれているのである。広東語でも、この2字がやはり類似する発音であるため、特に香港辺りでの「八」への投機熱は相当なものようである。このように中国語圏では、漢字は往々にして発音を重視して使用されている。それは漢数字に限ったことではなく、ナンバープレートでもアラビア数字の「8」が含まれるものは高値で取引され、「8888」と並べば、もう大変な価値が生じるプレミアものだという。調査によると、1988年8月8日に、福建、台湾、香港、マカオおよび海外の華人の中で開業する会社と企業は数年来最も多く、この日は8が多くて金持ちになる機会が多いとみなされるからである。北京オリンピックの開会式は、2008年8月8日の午後8時8分にスタートしたのは、「八」という数字は縁起がいいからである。

## 2. 「九」について

面白いのは、日本人の「八」に対する見方は中国人の「九」に対する観念に似ていることである。「八」は日本語のなかで上述した意味以外に「広大・広がる」という意味もあり、この意味を中国語では「九」で表してい

る。日本での「八」は無限度であり、その多さは計ることのできないように、中国での「九」もまた、見分けのつかない程という、無限の意味も存在する。

中国では、「九」は「久」と同じ発音で、永久で縁起が良いことを象徴して、昔から吉祥の数だと見なされている。中国人の目の中で、「九」は神秘的な色彩たっぷりの数字である。中華民族の「九」に対する迷信は天に対する崇拝に始まるといってもいい。同じく竜のトーテムにも係わる。『説文解字』に、「九、陽の変なり。その屈曲して究め尽くす形に象る。」というのもある。ある人はそのために考証して、「九」の原始の意義は九頭の竜である。『易経』は1～10の数字を奇数と偶数に分けて、奇数は天と陽性の物事を象徴して、偶数は地と陰性の物事を象徴する。「天数」の中で「九」が一番大きくて、極まりであるため、『易経』の中で重要な地位を占めていて、八卦で第1卦とされている。そこで、古人は「九」で天に代わって、天は竜と普通ではない関係を持つようになった。「九」で帝王をこじつけて、それを「九五之尊」と呼ぶ。だから、中国の歴代帝王はすべて「真竜天子」と自任していた。自分の権力が天に恵まれたことを表すために、彼らは全力を尽くして自分のことを「九」と関連させる。自分の「万歳」と王朝の「永久」を求めるために、彼らはさらに「九」に夢中になって、「九」はすでに皇室の象徴になって、帝王と密接に係わっている。皇帝と関係がある建物と器物はすべて「九」に離れられない。たとえば、天安門城楼は「九五」の数を建物の構造にして、間口9間、奥行き5間である。明の永楽帝の時に、北京に九つの城門が建てられており、故宮の家屋は9,999軒あり、故宮の太和殿の高さは9丈9尺あり、故宮のあらゆる扉にそれぞれ9列の釘が縦横に走っている。皇帝は九つの竜の模様入りの長着を着ている。天壇のたくさんの建物もすべて「九」と密接な関係を持っている。「九」を「天数（運命）」と称されるため、また物事の極限を象徴するため、中国語の中で「九」という数字で「広くて、広大で、多数である」という意味を表す言葉が多い。たとえば、「九重天」、「九霄雲外」、「九州方円」、「九牛一毛」などである。

「九」は中国の伝統文化の中でこんなに好まれているが、日本で「苦しんでしまった」。なぜなら、日本語の中で「九」は「苦」と発音が完全に同じなので、人生の幸せを迫及する人はもちろん「苦しみ」が身に訪れることをみたくないからである。そこで、「九」がある電話番号などを縁起が悪いと見なして、冷遇されている。たとえば、「49」の語呂合わせは「四苦」（仏教の中で人生の4種の苦痛、生、老、病、死の総称）で、「4989」の語呂合わせは「四苦八苦」（仏教の中で生、老、病、死の四苦に愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦・五陰盛苦をあわせたもの、人生の苦の総称）で、もし誰かがこのような数字を与えてくれたら、きっと怒りが胸中に燃え盛り、かんかんに怒るに違いない。

### 3. 好まれる数字と嫌われる数字

中国と日本はすべて漢字を使う国なので、言語の発音の面から吉凶を考える心理はだいたい同じぐらいといえる。しかし、中日両国の言語の発音は同じではないから、吉凶の言い方に大きな差がある。日本で、日本語の「四」は「死」と発音が同じなので、非常に嫌われている。日本のホテルの客室号と病院の病棟号はすべて「4」という数字を避けて、人々は日常生活の中でもできるだけ「四」の音読を避けて、「訓読み」を使う。その根源を究めて、古代の日本人が言語に対してごく質素な畏敬感を抱いたようだ。つまりいわゆる「言霊」信条である。彼らは言語に魂があって、そこに人類の知恵で制限できない不思議な霊威を含んでいると考えている。彼らは「いったん話し出したら、言った現象をもたらすに違いないと堅く信じていて、よい事あるいは悪い事が発生して、だから言葉と行為の上で遠慮があって、忌み言葉を生みました。このような素朴な認識はだんだん習慣を形成して今なお続いて、近代日本語の表現の形式の一種「忌み言葉」になった。「4」と「9」、この2つの数字は日本人のタブーとされて、人々はなるべく避けるのである。

これと反対に、中国人は「四」が好きで、「四」をととても重要な数字だと

見なしている。考察によると、「四」は古代に一つのめでたい数字であった。一方、「四」が偶数なため、中国人の偶数のコンプレックスを体現していて、数は「四」である時いつも人々を喜ばせるのである。「四海一家（世界の人々は家族のようになること）」、「四海兄弟（世界中の人は、みな兄弟のように仲良くしなければいけないということ）」、「四方八方（あらゆる方面）」、「四平八穩（極めて穏当である）」、「四通八達（交通網や通信網が四方八方に通じて便利だ）」、「四亭八当（すべての事が適切に手配することを形容する）」などの語句は、「四」が円満の気持ちを表せるからである。中国では「四」に対する賞賛の言葉が多い。たとえば、「四大古都」、「四大名山」、「四大書院」などである。中国の台湾と福建省南部地区にめでたい日に４種類の贈り物を贈る習慣があって、それを「四色を食す」あるいは「四色を送る」と呼ぶ。河北と青海などの地方で女性側に衣服を買って結納の金品を贈る時も四件あるいは八件を買う等、伝統の習慣は土地によってそれぞれ違う。

しかし、改革開放以来、中国の経済生活には巨大な変化が発生し、人々は数字に対して新しい理解を出してきて、それに特殊な意味と内包を与えた。近似音の原因でもともと愛顧を受けない「8」にますます人気があるようになった。「4」の近似音は「死」のため、人々は「4」には好感を抱かないようにした。台湾地区と福建省南部地区の多くの人は「4」を嫌うのは、「4」と「死」は方言の中で近似音だからである。例えば、「1274」と「要你去死」（あなたは死ね！）は語呂合わせになっているので、あまりにも縁起が良くない。同様に、「14」と「実死（本当に死ぬ）」、「24」と「兇死（息子が死ぬ）」、「45」と「死吾（わたしが死ぬ）」、「514」と「吾亦死（私も死ぬ）」、「574」と「吾妻死（私の妻が死ぬ）」、「884」と「爸爸死（父が死ぬ）」等はそれぞれ語呂合わせになって、すべて忌み言葉に属する。アモイ地区は2002年10月1日から、すでに「4」が付くナンバープレートを発給しなくなったのは、自家用車の持ち主の需要を満たすためである。もちろん、もし車の持ち主は本当に「4」が好きならば、別に申請することができる。

上述のように、発音によって吉を選び、凶悪を避ける心理は中日数字のカルチャーギャップの重要な特徴の一つであることが分かる。

## おわりに

数字の世界は広大で、数字の学問も尽きることがない。数字の文化の内包は深くて広くて、変わることが十分にある。世界で通用する数字は、国や民族によってその意味も違う。同じ数字は、異なっている国家と民族の独特な文化の心理を反映し、異なっている連想を誘発した。だから数字に対する崇拜と禁忌もまったく違っている。中国人は偶数をあがめ尊んで、偶数を良い数字とする観念のなかに伝統的な中国文化を含んでいる。日本人は奇数を好む習慣のなかに同じように伝統的な日本文化を含んでいる。私達は各方面から両国の宗教や信仰、価値観、伝統的な生活習慣、独特な審美の意識および独自の心理的特徴と思惟の方式を深く一生懸命に理解することこそ、異文化コミュニケーションのなかでカルチャーギャップによる誤解と衝突を上手に免れたり克服したりすることができる。

### 参考文献 [最新発行順]

#### 中国語文献

- (1) 赵军 (2007) 「漫谈数字与文化」『北京城市学院学报』
  - (2) 张桂芳 (2007) 「中国数字文化发展的人文生态维度」『学习与探索』
  - (3) 田小凤 (2006) 「从数字观透析中日两国文化的异同」『渭南师范学院学报』
  - (4) 卢永妮 (2006) 「浅谈日本的数字文化」『科技信息』
  - (5) 赵雪丽 (2005) 「语言教学中的文化与语言」『山西高等学校社会科学学报』
- CZX
- (6) 包央 (2005) 「中日数字文化漫谈 (2)」『日语知识』
  - (7) 包央 (2005) 「中日数字文化漫谈 (1)」『日语知识』
  - (8) 阚欣, 杨晔 (2000) 「日语中数字的文化内涵」『哈尔滨师专学报』
  - (9) 王晓澎, 孟子敏 (2000) 『数字里的中国文化』团结出版社
  - (10) 杨启光 (1999) 『文化哲学导论』暨南大学出版社
  - (11) 成良斌 (1995) 「中国数字崇拜与禁忌透视」『华中理工大学学报』



日本語文献

- (1) 金田一京助 (1998) 『新明解国語辞典』 三省堂
- (2) 金田一春彦 (2002) 『日本語を反省してみませんか』 角川書店
- (3) 新村出 (1998) 『広辞苑第5版』 岩波書店